

## 秋葉先生との長く楽しい付き合いを振り返って

職場の友人たちを代表して 波田 永実

秋葉先生は、二〇〇一年四月の法学部開設以来、本学学生の指導・教育にあたってこられました。退職記念号発刊にあたって、法学部長としてではなく、友人として先生とのおつき合いのなどを振り返りつつ、送る言葉としたいと思います。

先生と始めてお目にかかったのは、二〇〇一年の三月中頃だったと思います。法学部は新設だったので、その日、採用予定の全教員が集められたわけですが、一通り自己紹介や教務や総務などからの注意事項などがすでに、懇談する機会があったわけですが、第一印象は「面白い人があるもんだな」という感じでした。何しろお一人だけスーツ姿でゴム長靴を履いてスボンの裾をいれたお姿でしたから。私はそういう面白い人にはすぐ反応するほうなので、「どうして長靴なのですか」と聞いたら「バカヤロウ、青森は大雪で東京に出てくるのも大変だったんだ」と目をむいていわれたので、まわりで大笑いになったわけです。先生は青森大学から本学に來られたことをその時知りました。そういうファーストコンタクトがあったおかげか、先生とはすぐにうちと

け以降仲良くさせていただきました。私と、山崎徹先生、それから現在は国士館大学に移られた山口康夫先生などはすぐに秋葉研究室をたまり場にして、だべったり、飲む相談をしたりしていました。実は秋葉先生は下戸でお酒は全く飲めませんが、なぜか酒席は好きで、飲まれないのに不思議と「座持ち」がいいのです。そして毎回必ず、「俺は損だよな、飲まねえで同じワリカンだもん」と言いつつよく付き合ってくれました。法学部には秋葉先生がどうしても頭の上がない先生がおられました。それが商法の徳永哲男先生で秋葉先生の学生時代の指導教授で、学問の道に入ったのも徳永先生のご指導があったからです。この徳永先生がまた親分肌の実にいい先生で、「おー、侃（つよし―秋葉先生のお名前）面白そうな話してるな、俺も仲間に入れろよ。」と私たちが秋葉研究室で馬鹿話をやっているところに入ってこられました。年上の秋葉先生のさらに指導教授ですから我々には大先輩なので、「顧問」という名前を奉り飲んだり、いろいろな相談事を持ちこんだりました。お二人はまことにうらやましい師弟関係でした。

先生は在職中に二度の大病を経験されましたが、いかにも秋葉先生らしいなと思ったのはその楽天性です。先生はいわゆる「天然」なので病院での出来事で医者や看護師に叱られたことなどを面白おかしく話すので、ついこちらも深刻な病気の話をしているのに思わず笑ってしまうことがたくさんありました。

そんな秋葉先生が定年を迎えて退職されました。少し寂しく思いますが、時々会ってまた笑わせてくれることを期待しつつ送る言葉といたします。